

その「文理」を胸中に蓄えるというものであり、作文法はその蓄えた「文理」を「平常の説話」の如く字句に拘らずに直接的に表現するというものであった。

「平常の説話」の如く作文をするというのは、彼の英学の素養とも密接に関わっていると考えられ、洋学流入全盛期である幕末明治期における特徴的な文章論だと言える。

本発表では、学問形成期から明治以降にいたるまで、敬宇の生涯に渡る文章論について、文稿あるいは文集を中心に用いて考察を試み、さらに、それが日本の近代化過程において何らかの役割を果たしたのではないかとという新たな課題へと繋げたい。

『人文論叢』第一〇七輯の訂正

「二松学舎大学人文学会第一二二回大会 研究発表要旨・特別企画題目」(p.141-145)の掲載内容に不備がありました。訂正してお詫び申し上げます。

p.143 上段 十一行目

〈第I会場〉五件目の研究発表要旨を追加。

最後の元残留日本兵

—インドネシア独立戦争の陣中日誌を読み直す—

本学専任講師 林 英一

「アジア解放戦争の英雄」として理解されがちなインドネシア残留日本兵の犠牲に着目し、対オランダ独立戦争の日常について考察した。最後の元残留日本兵と呼ばれたラフマツト・小野盛氏の陣中日誌の記述から、残留日本兵たちが風土病に苦勞していたこと、兵器の改良に失敗して事故が起きていたこと、事故死を「戦死」と装うこともあったことを指摘し、「アジア解放戦争」の現実が過酷なものだったことを一次史料によって裏付けた。